■言葉は民族の特色を表す

“牛”についてはcowか、bullか、oxかといふやうに、細かな見方をする欧米人が、“虫”だと実に大雑把な見方をする。その反対に、“牛”については大雑把な見方をする日本人が、“虫”だと“松虫”か、“鈴虫”か、それとも“蟋蟀”か、といふやうに細かな見方をする。その原因は、直接的には、言葉の違ひにあるわけだが、その言葉の違ひは生活の違ひから生じたものである。

英米人は、昔、長い年代にわたり、牧畜を生活の拠り所としてゐたから、私たち日本人のやうに、性や数を超越した“牛”といふ言葉よりも、cowやbullのやうな性を伴った言葉の方が必要だったのである。

それに反して、農耕を生活の拠り所として一定の土地に住み続けて来た私たち日本人にとっては、“牛”といふ言葉があればそれで十分であり、それよりも、大切な季節の移り変りを知らせてくれる“虫”の方がずっと関心が深かったので、虫の形や鳴き声の違ひにも敏感で、従って、これを“松虫”“鈴虫”“蟋蟀”といふやうに区別したのである。

言葉は、人々が生活を営んで行く上の必要から作り出したものが多いので、生活の仕方が異れば、必要な言葉もそれに従って異ってゐるのが当然である。それで、牧畜民族には牧畜に必要な言葉が多く作られ、農耕民族には農耕に必要な言葉が多く作られたのである。

■人が作った言葉が人を作る

このやうに、言葉は人々がその生活の必要から、次いでその生活を豊かなものにするために、「人が作ったもの」であるが、すでに述べたやうに、「人は言葉で考へる」ものであり、また、「言葉で物を見る」ものであるから、「人は言葉によって作られる」といふ逆の面があることに注目する必要がある。

「人が言葉を作る」「作られた言葉が人を作る」「作られた人がまた言葉を作る」……y」の相互作用を重ねることにより、人間は向上し、言葉も向上して豊かさを増し、現在の高い文化を人類は享受することが出来るやうになったのである。